

ニーズレター

(2018年 新春号)

グループホームネット香川



もくじ

- 理 事 長 卷 頭 言 (2)
- 最 近 の 活 動 の 様 子 (4)
- 事 務 局 便 り (6)

▼ △ ▼ △ **理事長巻頭言** ▼ △ ▼ △
グループホームの運営方針について

理事長 細谷 要一

明けましておめでとうございます 本年もよろしくお願いいたします

昨年末、グループホームネットワーク香川(GHNK)では、グループホーム事業を開始して初めて利用者(入居者)、スタッフ、理事みんな参加しての忘年会が催されました。プログラムや準備は利用者の方々とホームワーカーが行って、大変楽しく過ごすことができました。GHNKにとって有意義な一日になりました。

GHNKのグループホームが始まって20年となる今、改めて運営方針について触れてみたいと思います。

GHNKは、その活動理念に謳われているように、精神保健福祉に関心のある人々が「市民」の立場で集まり、精神障害がある方の社会参加が実現できるよう環境づくりを進めていくことを使命と考えています。グループホームは、この基本方針の上に立って運営されています。

精神科の病気になるということは、その症状の辛さの上に“生活のしづらさ”が重なります。特に、精神科病院への入院ともなれば意思に反して入院させられたり、症状によっては隔離拘束や行動制限を受けることもあります。投薬時に“みんな並んで、ツバメの子のように口を大きく上に向け開けさせられた、それが一番無念だった”という訴えも聞くことがあります。

治療に必要だとしても、またその処遇基準に個人の尊厳・人権に配慮…と規定があったとしても、入院体験者のなかに“入院は屈辱的で心の自由まで奪われた”という人がいることが問題です。

精神科病院がどこもそうだということではありません。個人個人に合わせ、人と人とのかわりのなかで治療している病院も多くあります。ただ、人間的な扱われ方をされなかったという話は、入院体験者の話の中ではまだまだ過去の話ではありません。

“社会的入院”や、何十年という長期入院によるホスピタリズムの問題、就労・経済的保障、家族・地域など生活のしづらさをもたらすものは、多岐にわたります。なかでも、“入院治療により症状は回復しても、人としての誇りを失ったり、生きる力を消沈させてしまう”という問題は大変重大なものになります。

そこで、この大事な人間性を奪われるという体験をした精神障害がある方が、地域で生活をしていくためには、失われた人間性の回復が必要となってきます。それは、人として尊重され、自己決定権が認められる環境のなかで、初めて自らの価値、感情、役割、生活技術が再獲得できるものとなります。

グループホームを利用する方の中には、入院の経験がない方、知的障害のある方もいます。しかし、生活のしづらさは個々人の差がありますが、この人間性が損なわれるというところについては、共通するものがあります。

われわれ GHNK が運営するこのグループホームでは、人間性を尊重する環境を整え、利用者が自らの生活を再構築していけるよう支援を行うことを目標にしています。利用者が、地域社会のなかで主体者としての生活を取り戻し、市民として「あたりまえの暮らし」を創造していくことを願っています。



▼ △ ▼ △ 最近の活動の様子 ▼ △ ▼ △ ～ 忘年会に参加して ～

はじめての忘年会に参加された入居者の方から、
ひとこと感想をお聞きしました。



法人全体の研修をのぞくと、
はじめての室内での合同行事となりました。
あらたまって乾杯。ちょっぴり緊張も？

利用者・スタッフ・理事の壁を
越えて皆で、食べて、歌って、
踊って、マジックもあり、楽し
かったです。 (春日の局)

それぞれのグループホームから、手作りの料理を持ち寄りました。
おにぎり、サンドウィッチ、チーズケーキ、・・・ 美味しそう！！

GH単位で料理を
作ったことが
なかったので、
楽しかった。

料理がたくさんあって驚いた。
ただ、個人的に白いご飯が大好きなので、すぐに
無くなってしまったことがとても残念だった。
カレーが一番、美味しかった。(SAI)



手料理の持ち寄りが
良かった。

色々な食事があって
お腹一杯になった。
(ルキア)

楽しかった、
料理がおいしかった。
(レン)



余興も大いに盛り上がりました。
いつもの伸びやかな美声を披露する人あり、
即興でテーブルマジックにチャレンジする人
あり、種も仕掛けも・・・
さて、成功したのでしょうか？



歌やおどりが
楽しかったです。
(チョコボ)



自己紹介や
にぎやかなことが苦手、
来年は参加しない。

大好評だった手作り
カレーは、この日のた
めに前日から仕込ん
で下さった特製の味
でした。



「私のカレー日記」 (ボンカレー 大好き)

私は昨年、忘年会で食べるカレーをつくることを頼ま
れた。

これは私にとって課題となった。今どきカレー専門店
でない飲食店でも、レトルトでも、家庭で食べるカレー
でも、世間でもはや、まずいカレーなどないと思った。

それを思うと正直困ったし、悩んだ。私は、時に、自
分の入居するグループホームの皆さんに、自分のカレー
を食べてもらったりしている。私は準備の時間もあつた
が、もういつものカレーをつくるしかないと思った。つ
くったのは忘年会の前日、時間もいつもの通り3時間か
かった。当日私は仕事で、欠席している。夕方世話人さ
んからメールをもらった。カレーは好評だったらしい。
私は安心した。と同時に、うれしい気持ちがこみあげて
きた。これで私の役目を達成できたと思えた。

▼ △ ▼ △ **事務局便り** ▼ △ ▼ △
～ **2018年をおかえて** ～

事務局員 増田 周作

7月号から少し期間が開いてしまいました。

7月以降の動きとしては、新しく2名の方が入居され、2名の方が退去するという状況になっています。

2月1日の現状としては、2室の空室があるという状況です。

さて、私たちは、グループホームに「ビアーズ〇〇」と名付けて、運営、活動を行っています。

ビアーズというと、過去には「ビールのことですか」と聞かれたこともあります。実は、アメリカ精神衛生運動の創始者、クリフォード・W. ビアーズ氏の名にちなんで、ビアーズと名付けています。

ビアーズ氏は、アメリカの精神衛生運動家で、うつ病を発症し、自らの精神科病院へ入院した時の体験から、患者がおかれている悲惨な入院の状況、また非人間的な扱いの実態を1908年「わが魂に会うまで」という自叙伝の中で指摘し、精神疾患への理解と精神病院改革を世に訴えた方で、ビアーズ氏の活動が、今日の精神保健福祉の拡がりをつくっていったと言われています。

精神衛生運動自体は、一種の社会運動であり、障害の当事者が当事者を支援するピアサポートとは異なるものですが、著書の『わが魂にあうまで』の中には、ビアーズ氏が同じ病を経験した者として、精神科病院にいる人たちを救いたいとの思いに突き動かされていく姿が見られます。

当事者として活動を始め、精神科医療だけでなく様々な分野の人々を動かして運動を展開し、専門家も含めた運動の中心人物であったビアーズ氏は、私たちが目指す法人としての活動理念にも合致していると言え、その名前をグループホームの名前として使っています。

入居者、会員のみならず、関係機関のみならずとネットワークを築き、安心して生活が営めるグループホームとしていければと思っています。

(発行) 特定非営利活動法人 **グループホームネット香川**

連絡先: 香川県高松市円座町1124番地6

TEL: 087-885-5270

Fax: 087-887-5955